



# 北方民族博物館だより

No.63



D17.5 かんじき (ヘヤー／カショーゴティネ)  
 カナダ／北西準州 1962年頃製作  
 長さ105cm×最大幅19.5cm

原ひろ子コレクションより

かんじきは、雪上を移動する時に用いる道具である。足底の面積を増やすことによって体重を分散させ、柔らかい雪のなかに沈むことなく進むことができる。枠は白樺やトウヒを材料とし、これにバビーシュとよばれるヘラジカの生皮でつくった紐を網目状に張って作る。この資料は旧蔵者である原氏のために作られたもので、少々小ぶりである。

- 1 表紙「かんじき」
- 2 第21回北方民族文化シンポジウム
- 6 企画展「原ひろ子コレクション展」／北海道博物館紀行「斜里町立知床博物館」
- 7 調査報告「能取岬西岸遺跡第二次調査」／調査速報「2006年度モンゴル調査」
- 8 INFORMATION



## 『第21回北方民族文化 シンポジウム』

2006. 10. 25, 11. 4 - 5

会場：オホーツク・文化交流センター

昨年20回の節目を経て、今年度のシンポジウムはやや趣を変え、「博物館と民族文化」をテーマに博物館の存在意義や地域貢献について考えることを目指しました。民族文化を対象とする国内外の博物館関係者を招き、展示を含む各種の活動や地域との連携についてなど、実践的な内容の発表と討論を行いました。以下に概略を紹介いたします。

### ● コンサート・北方の音楽「カンテレの調べ」

10月25日 午後6時30分～8時

演奏：エヴァ＝アルクラ氏

aasian kukka (アアシアン・クッカ)

＜扇柳トール氏、あらひろこ氏＞

共催：オホーツク・文化交流センター

シンポジウムの関連事業として、フィンランドの伝統的な弦楽器であるカンテレのコンサートを開催しました。札幌圏を中心に活動を行なっているアアシアン・クッカのお二人と北海道での留学経験があり、来日中だったアルクラ氏のジョイントで、北欧の伝統曲をはじめ、日本の歌などを交えた多彩な楽曲を聴かせていただきました。

カンテレを初めて聴くという市民も多く、参加者は熱心に耳を傾けていました。その繊細でやさしい音色を存分に楽しんでいただけたと思います。



### ● シンポジウム 11月4日－5日

【第一部】＜日本における異文化展示＞

座長：岡田淳子氏（北海道東海大学名誉教授）

庄司博史氏（国立民族学博物館教授）

「新たな多民族社会展示のこころみ

－国立博物館における移民展示の意味」



現在、日本の外国人は正規登録者だけで200万人を超え、一般にとって日常的な接触は珍しくなくなり、行政における多言語サービスや外国人への差別的な法律制度等の改善も始まっている。とはいえ、外国人に対する差別や偏見も依然としてある。

2004年に開催した特別展「多みんぞくニホンー在日外国人のくらしー」は、在日外国人の現状を伝え、さらに外国人の増加が将来の日本社会を変化させる可能性を提示して、共生の道の模索をうながすことを目的とした。先行事例のないことや資料が少ないなどの課題もあったが、外国人コミュニティと関わる活動してきたプロジェクトメンバーと当事者である人びとの協力により、彼らの視点に立った展示ができた。今後多民族化の潮流のなかで、民族学博物館には共存の道を模索する使命が要求されるだろう。

宮里孝生氏（野外民族博物館リトルワールド研究員）

「世界の民族資料を活かす場としての博物館のミッションと役割」



博物館が社会に貢献するための資料の活用法について、展示を中心とした活動を例に論じる。リトルワールドでは教育普及活動の理念として、多様な価値観を示し、現代社会を再考する機会の提供を掲げている。具体的には五感（「視覚」「触覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」）を使った体験ができる環境を整え、来館者が複数の感覚を併用する展示法を採用している。この知覚展示は来館者の能動的な関わりを引き出し、モノを身近に感じ、意義深い体験をしたと実感してもらうことができる。

野外の住居の展示においては植栽や方位観など環境も含めた復元に努めている。そして、解説活動などを行う一方で、祝祭など「ハレ」の空間を演出するなど、異文化に対する動機付け・興味付けのしなやかさを多数配している。

## 【第二部】<博物館の基盤 ー資料収集ー>

座長：津曲敏郎氏（北海道大学教授）

コメンテーター：大島稔氏（小樽商科大学教授）

スヴェン＝ハーカンソンJr.氏

（アルティーク博物館館長）

「アルティーク博物館がコディアックの伝統啓発と伝承に果たしている役割：ハンズ・オン・プログラムをとoshした実践」



コディアック島は7500年前の遺跡が残る地であるが、ロシア領化された18世紀後半から歴史が始まったように扱われる。ロシアとの接触後わずかの間に人口は激減し、ロシア正教の布教が行われ、言語や慣習や伝統的知識が失われた。1867年にアラスカがアメリカの手に渡ると、さらにロシア語から英語への転換などの混乱も起きた。

しかし、ここ20年ほどで状況は変わり、我々は歴史を取り戻し、文化の共有と理解を進める活動を始めている。具体的には、住民参加による発掘調査やラジオによる言語講座、民族出身芸術家によるワークショップや学校の教室での移動展などを行っている。これらの取り組みは、伝統的知識を日常生活の中で活かすこ

とや、若い世代への伝承にも効果をあげつつある。

長谷部一弘氏（市立函館博物館館長）

「地方博物館の先駆け・市立函館博物館

ー収蔵資料の来歴と今後の活用」



市立函館博物館は、1879年に明治政府によって設置された国内で最も古い地方博物館の一つである。収蔵されている北方民族資料は、「函館博物館旧蔵資料」「馬場脩コレクション」「児玉作左衛門コレクション」という3つの大きな資料群から成っており、総数1万2千件を数える。これらは明治期から第二次世界大戦前後に収集された貴重なものばかりで、その保管・記録に努めてきた。

今後は、外国を含む他機関の資料と比較した当該資料の位置づけや、データベースの共有化などを図り、記憶に残る博物館資料としての活用を考えていかねばならない。

具人 恵氏（富山大学教授）

「資料収集が繋げる博物館と言語学者：なぜ私たちは共にコリヤーク・コレクションに取り組んだか？」



コリヤーク語研究を行うかたわら、2003年から北方民族博物館と連携して、トナカイ毛皮を利用した衣類や住居を中心に100点余りの資料の収集に取り組んできた。製作者や材料、作成方法などの情報の聞き取りのみならず、録音され音素記号で表記された名称の収集と分析が行なわれることにより、博物館・言語学者双方にとって多様な利用が可能な奥行き深いコレクションとなった。

この過程で明らかになったトナカイ毛皮の使い分け

やりサイクルシステムなどを紹介する。併せて収集の際に用いた調査票から成果品としての展示、物質文化事典などの具体例を示し、モノを介した博物館と研究者の両方向的な関係を提言する。

事例報告：渡部 裕（当館学芸主幹）

「原ひろ子コレクション展について  
—その資料収集の意義—」



原ひろ子氏が1960年代初期にカナダで調査を行なった際に収集した衣類やワナなどの実物資料28点と植物標本および写真、録音テープなどが、平成17年度に当館に寄贈された。同コレクションは45年前のヘヤー・インディアン（カショーゴティネ）の文化を伝えるものであり、原氏が調査上必要としたものばかりである。文化人類学者が調査の過程で収集した資料は、付随する情報の豊かな価値あるものといえる。（関連記事は本紙6頁）

### 【第三部】＜博物館活動と地域文化＞

座長：秋野茂樹氏（財団法人アイヌ文化振興・  
研究推進機構課長補佐）

内田祐一氏（帯広百年記念館学芸員）

「地域住民との架け橋としての博物館の役割  
—帯広百年記念館アイヌ民族文化情報センター  
『リウカ』の活動について—」



帯広百年記念館では、展示をはじめ、講座や自然観察会など市民向けの学習の場を提供してきている。帯広市がアイヌ民族に対する施策として掲げる「アイヌ民族についての理解促進」「文化の振興」「教育の振

興」「生活の自立と生活環境の充実」の4つの柱に沿って、博物館における機能をさらに補完するため、表題の情報センターが今年1月に館内に開設された。

ここでは、市民が自ら学習できるよう、書籍や映像・音響資料類の整備とともに、職員らによるアドバイスや解説等を行なっている。アイヌ文化に関する行事の案内や、学校等からのレファランス、ホームページの充実など情報センターとしてなすべきことは多い。今後は関係機関などとも連携し、事業展開を考えていきたい。

ウォルター=A=ヴァンホーン氏

（アンカレッジ博物館学芸員）

「エスキモーによる絵画：19世紀後期から  
20世紀初頭の生活についての考察」



ロシア領有期からアメリカ合衆国の初期接触時代における西アラスカのエスキモー社会に関する記録として、欧米人が残した文献はあるものの、先住民自身による直接の情報はほとんどない。例外として、セイウチの牙に線刻されたものや学校で生徒たちが紙に描いたものがある。ここには、狩猟、儀礼、家庭での暮らしや戦闘、そして彼らの住む村や海岸に現れた欧米人捕鯨者、交易者などに対する先住民の見方が示されている。

アンカレッジ博物館では、他の博物館や図書館等に収められた関係資料を集め、展示とともにカタログを作成した。先住民の作家に関する情報をまとめあげ、これらの絵画を活用できた。

事例報告：中田 篤（当館学芸員）

「特別展をとおして伝えた遊牧文化」

北方民族博物館では、常設展示を補完するようなテーマで特別展を実施している。2004年度の「北の遊牧民」展では、北方地域の遊牧文化の変遷と広がりについて、環境の異なる「ステップ」「タイガ」「ツンドラ」の三部構成で、家畜との関わりを中心に人びとの生活を紹介した。展示資料であるモンゴルの住居ゲルを、特別展開催前に講習会として市民参加で建て、その一部を展示室外に露出させるなど新しい取り組みも

行なった。また、担当者が現地で収集に携わった資料もあり、実際に見聞した情報を展示で伝えることができた。



#### 【第四部】<博物館の交流と展示>

座長：渡部 裕（当館学芸主幹）

野本正博氏（アイヌ民族博物館学芸係長）  
「海外におけるアイヌ文化の展示と交流」



アイヌ民族博物館は、フィンランドのサーミ博物館と20年を超える交流を持ち、ロシアの博物館等とも交流を続けてきた。1989年に白老町で開催した「北方民族国際フェスティバル」では多くの町民の参加を得ることができ、アイヌ民族と博物館の存在意義を地域社会に示す結果となった。

他にも海外での展示協力などを行ってきたが、発表者が共同作業したものとして、特に1999年にスミソニアン研究機構の国立自然史博物館で開催した「アイ

ヌ：北方民族の精神」が挙げられる。作業中には意見の相違なども経験したが、自身の抱くアイヌ文化イメージが一面的だったことや文化の表現が多様であってよいこと等を学ぶ機会となった。今後もアイヌ民族自身による伝統的な文化に偏らない、新たな形で展示が必要と考える。

手塚 薫氏（北海道開拓記念館学芸員）

「欧米の博物館との交流－民族展示における共同作業への試み」



開拓記念館は海外交流事業として、職員相互の派遣や展示会等を行ってきた。近年の北米では、時代順の構成や「伝統的」な資料で歴史・文化を展示する手法は、先住民の現状を伝えず、本質的な文化観を再生産させるとして糾弾されるケースが増えており、カナダ・アルバータ州の博物館との交流では先住民への配慮や協力関係等の点で触発されることも多い。

昨年（財）アイヌ文化振興・研究推進機構との共催で開いた『ロシア民族学博物館アイヌ資料展－ロシアが見た島国の人々』は、所蔵者側の要望等の制約があったものの、アイヌ民族の工芸作家らとの共同作業で新たな経験を積むことができた。子どもに関する資料の豊富さを活かし「父母の愛情に生まれた子ども」というコンセプトを際立たせ、工芸家の視点で書かれた資料ラベルを付すなど、ユニークな試みとして評価できるだろう。

#### ●各部での質問・コメントおよび総合討論

各発表の後の質疑応答の時間では、より詳細な内容に関する質問や、課題解決のための意見など熱心な発言が相次ぎました。総合討論では、参加者からの関心が高かった展示手法、特に資料に付随する情報をいかに伝えるかということや、学校との連携に関する事などが討議されました。十分な時間もなく、課題も残りましたが、今後のシンポジウムや博物館活動でも取り上げていきたいと考えています。

（学芸グループ 齋藤玲子）



## 企画展

## 『原ひろ子コレクション展』

2006. 10. 21 - 12. 10

原ひろ子コレクションは文化人類学者・原ひろ子氏がカナダ極北部の北西準州に住むヘヤー・インディアン（自称カショーゴティネ）の文化を調査された際に入手した民族資料、植物標本および記録された写真、録音テープなどから構成されています。これらの資料は平成17年度に当館に寄贈されました。原ひろ子氏はアメリカ合衆国プリン・マー大学の博士課程で学びながらカナダ政府の資金を得て1961年6月から9月、さらに1962年6月から翌1963年1月の2度にわたり現地で調査をされました。当時、ヘヤー・インディアンの人口は約350名ですが、外部の世界で彼らの文化を知ることには少なく、原氏の調査によって初めて詳細な文化が知られるようになりました。

今回展示された資料は民族資料のすべて28点、写真パネル30点、植物乾燥標本数点です。民族資料の点数は必ずしも多くありませんが、保存状態は極めて良好で当時の状態を保っていると思われます。写真は原ひろ子氏の著書で使われたものを中心に展示しました。子どもたちの生き生きとした表情、女性たちの働く姿、ヘラジカ皮のなめし工程を記録したものなど当時の生活を髣髴とさせる写真です。

原ひろ子氏はこの調査成果をさまざまな角度から報告され、一般書としても『ヘヤー・インディアンとその世界』（平凡社）で詳細に紹介されています。原ひろ子コレクションはこうした記録とともに、45年前の文化を伝える貴重な資料であり、今後も大切に保存し活用していきたいと考えています。

(学芸グループ 渡部 裕)



## 北海道博物館紀行

## 『斜里町立知床博物館』

2006. 10. 7

講師 合地 信生氏（斜里町立知床博物館総務課長）



北海道博物館紀行は、道内の博物館を紹介する催しです。知床博物館は動物学、植物学、地質学、考古学を研究するスタッフを揃えており、各専門分野の学芸員が調査成果を通じて、知床半島の自然や斜里町の歴史を様々な角度から紹介しています。今回は地質学をご専門とされる合地信生氏を迎え、知床博物館でも人気の高い「石磨き」の指導をお願いしました。

石を磨く最も単純な方法は、研磨材（粉末の酸化アルミニウム）に石をこすりつけて手で根気よく研いでゆくことですが、これでは時間がかかります。そこで今回は、合地氏が作られた研磨機を利用しました。この研磨機に水で溶いた研磨材を入れ、研磨機を回転させ石を磨いていきました。片手で石を押さえながら、もう一方の手で研磨材を盤上に振りかける作業をひたすら繰り返しました。石は合地氏が斜里町で拾った瑪瑙を使用しました。

ある程度磨き終わった後は、プロの仕事です。酸化クロムという研磨材を用いて仕上げます。酸化クロムは毒性が強いため、合地氏は帽子をかぶり、ゴーグル、マスクを付けて外で作業を行い、参加者全員の石を仕上げてくださいました。磨きあがった石には宝石のような光沢があり、参加者は満足されているようでした。

今回使用した瑪瑙は斜里だけではなく、網走の海岸沿いでも拾うことができることを知った参加者の中には、自分で拾いに行こうと言われる方もいました。今回の催しによって普段あまり気にとめない石に興味を持っていただけたと思います。

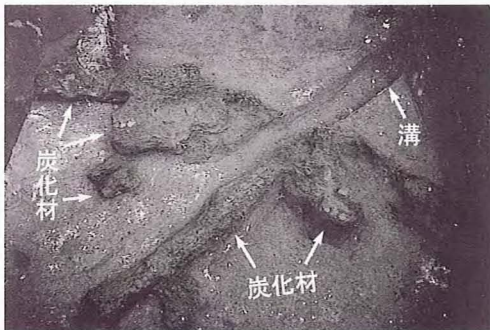
(学芸グループ 角達之助)

## 調査報告

『能取岬西岸遺跡  
第二次調査』

2006. 9. 29 - 10. 15

調査担当者 角 達之助 (当館学芸員)



平成17年度より、当館では能取岬西岸遺跡（網走市字美岬10・12番地先）で、オホーツク文化期の竪穴住居址を発掘しています。

今年の発掘地点は、昨年発掘した5m×5mの範囲の南側に接した場所に決めました。昨年の成果として住居内部中央付近の様子がわかりましたので、今年は住居の壁付近の様子を確認することに重点を置きました。

昨年に引き続き5m×5mの範囲を約2m近く掘り下げてゆくと、家屋の建築部材に使用されたと思われる木材が焼けた状態で数多く出土しました（写真）。木材の保存状態は良好で、一部の部材は地面に突き刺さったまま出土しました。

オホーツク文化の住居では、通常壁際に溝をめぐらせ、そこに樹皮を巻きつけた丸太や板状の木材を差し込むことで、土が住居内に流れ込まないようにする工夫が施されています。今回出土した多くの木材はこの部分に相当します。これらの木材によって、住居の壁の位置を想定することが可能となりました。なお、壁際の溝は一本ではなく、二本ありましたので、壁の位置を移動させ、住居の大きさをかえた「建て替え」の可能性が考えられます。また、木材の列や溝の巡り方が「く」の字型をしており、オホーツク文化の竪穴住居に特有の五角形（または六角形）のラインの一部を明瞭に捉えられたことが、大きな収穫だと思っています。

来年度以降の調査では、今年見つかった壁のラインをたどって壁全体を確認し、また通常住居の最奥部にある動物の骨を堆積した骨塚の有無を確認する予定です。

## 調査報告

『2006年度モンゴル調査  
(速報)』

2006. 9. 14 - 9. 29

調査者 中田 篤 (当館学芸員)

私はトナカイ遊牧を研究テーマとし、2001年よりモンゴル北部に住むツァータンと呼ばれる人びとを対象に調査をしています。今年は9月14～29日までの16日間、現地調査のためにモンゴルを訪れました。現在調査の整理や分析をおこなっている最中ですが、この場で概要をお知らせします。

今回の調査は、特に夏の放牧やトナカイの利用法などを明らかにすることを目的としていました。滞在できる日数が少なかったため、聞き取りを中心に調査をおこないました。

その結果、夏には標高の高い開けた場所でトナカイ放牧をおこなうこと、放牧に人は付き添わず、日中はほとんど放し飼いの状態にしておくことなどがわかりました。これまで調査した春や秋とはまったく違う放牧方法です。ツァータンは、トナカイの行動特性やその他の生態的要因に合わせ、放牧方法を柔軟に変化させているのでしょう。

また、搾乳は1日2回朝と晩におこなうこと、搾った乳はチーズ、バター、まれにヨーグルトなどに加工されることもわかりました。こうした乳製品は、隣接する草原地域のものによく似ており、その影響がうかがえました。

調査に快くご協力下さったツァータンの皆さんに感謝します。なお、本研究は、平成18年度科学研究費補助金（奨励研究）（課題番号：18909013）によっておこないました。



## INFORMATION

## 企画展 北の台所事情—食にまつわる道具類—

2月3日[土]～3月25日[日]

会場 当館特別展示室 観覧 無料

器や調理具を通じて北方における食文化の特徴を紹介します。

## &lt;関連事業&gt;

- 講演会「北海道の器—古代の器を中心に—  
2月4日[日] 14:00-15:30 ※道民カレッジ連携講座  
講師 田中哲郎氏（北海道教育庁文化・スポーツ課主査）
- 講座「オホーツク文化の台所事情」  
2月24日[土] 14:00-15:30 ※道民カレッジ連携講座  
講師 角 達之助（当館学芸員）

平成18年度 企画展  
北の台所事情  
2/3(土)  
3/25(日)  
食にまつわる道具類  
観覧 無料

オホーツク文化 歴史 人 アイヌの暮らしのまどから

休 日 日 月 火 水 木 金 土 日  
休 日 日 月 火 水 木 金 土 日  
休 日 日 月 火 水 木 金 土 日  
休 日 日 月 火 水 木 金 土 日

北海道立北方民族博物館  
Hokkaido Museum of Northern Peoples  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1(支庁: 道庁オホーツク支庁)  
TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889 http://hoppohm.org

## 北海道博物館協会表彰

当館にイヌイトの資料を寄贈した功により、光洋マテリア株式会社から平成18年度北海道博物館協会表彰を受けました。

## 北海道功労賞

当館谷本一之館長が、「アイヌ・北方諸民族文化の研究と芸術文化の振興」の功績により、平成18年度北海道功労賞を受賞しました。

## 来館者のおたより

当館では毎春、博物館の庭で咲いた花の種を来館者にプレゼントしています。その種でマリーゴールドが咲いたと静岡県の中村さんからお写真を送って下さいました。



## 行事報告

- ◆北方民族博物館シアター  
11月3日 [金]
- ◆博物館クラブ  
「狩猟具づくり」  
11月18日 [土]

## カムバックサーモンin網走湖

10月1日～11月12日の期間「カムバックサーモンin網走湖」会場でパネル展示を行いました。

## あばしりまなび塾

11月23日に「2006あばしり学び塾フェスティバル」会場で、革製ストラップづくりの指導を行いました。

## 普通救命講習会

12月8日に当館の全勤務者を対象に普通救命講習会を行い、心肺蘇生法とAED（自動体外式除細動器）の使用手順について学びました。（※当館にAEDはありません）

## 高校放送局の取材

ラジオ番組「ウイルトゥ～民話という架け橋～」を作成のため当館で取材を行なった北海道北見緑陵高等学校放送局が、同作品で、第29回高文連放送コンテスト（全道新人大会）3位に入賞されました。

北方民族博物館だより  
No.63

平成18(2006)年12月22日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
電話 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889  
e-mail : tonakai@hoppohm.org  
http://hoppohm.org  
指定管理者  
財団法人北方文化振興協会